

奈良県天理市長柄方言の待遇表現

中井精一

I、はじめに

(1) 調査対象地：天理市長柄町は奈良盆地の東部に位置し、水稲耕作を中心とする平地農村で、中世以来、奈良盆地の各地に発達した典型的な環濠集落のひとつでもある。近年は大阪の通勤圏として集落内外に新たな住宅が多数建築され、この集落をとりまく環境も大きく変わろうとしている。

現在、長柄町は近世以来の本村に269戸、1016人が暮らしている。

(2) 調査年月日時：1997年3月27日午後1時30分～3時15分

(3) 話者：松岡ツヤ子 大正13年12月4日生（73歳）無職

(4) 調査者・調査場所：中井精一、話者宅

(5) 調査方法・調査時の状況：調査者ならびに被調査者が共に奈良県方言のネイティブスピーカーであり、親しい間柄であることも手伝って和やかな雰囲気、精度の高い調査が行えたと考える。

(6) 表記方法：調査では出来るだけ質問文に留意し、調査項目の主旨を逸脱することのないよう慎重を期したつもりであるが、必ずしも全ての項目において設問主旨にそった回答を得ることは、調査進行上不可能であった。したがって、こういった箇所に関しては状況に即した対応をとり、その箇所では表記した。また、調査時におけるインフォーマントのコメントは〈 〉に記載した。

II、調査結果

1. 尊敬表現

1-1 対者敬語

- (1) A 「お前」は、アン「タ
「元気かね」は、「ゲ」ンキニシタハルノ
「ゲ」ンキニ「シタハリマス」カ
- B 「あなた」は、付けない
「元気かね」は、「ゲ」ンキニ「シタハリマス」カ
- C 「あなた」は、付けない。
「元気かね」は、「ゲ」ンキニシ「タハリマス」カ

老年層女性の設定場面（A親しい友人・B近所の年長者・C土地の目上人）では、全てに尊敬の助動詞「ハル・ヤハル」を用いる。ただ対者Aに対しては「ハル・ヤハル」を伴わなくても違和感はない。

また、この地域の老年層では、テイル形への接続は、京都などと同じ「タハル」を用い、大阪の影響を受けて使用される若年層の「テハル」と世代差を見せる。

- (2) A 「あしたは家に居るか」は、「アシタウ」チニ「イン」ノ

- 「アシタウ」チニ「ヤハ」ルー
- B 「あしたは家に居るか」は、「アシタウ」チニ「ヤハ」ルー
- C 「あしたは家に居られますか」は、
「アシタウ」チニ「ヤハリマス」カー

やはりこの場面（A 親しい友人・B 近所の年長者・C 土地の目上人）では、全てに尊敬の助動詞「ハル・ヤハル」を用いることの方が違和感はない。

なお、京都を中心とした広い地域では「ハル・ヤハル」は、五段動詞には「ハル」で、それ以外の動詞（ここでは「居る」）には「ヤハル」で接続する。これに対して大阪を中心とした地域では、動詞の活用の種類に関係なくすべて「ハル」を用いる。

奈良盆地では、この老年層の調査結果のように、従来からの京都を中心とした用法と、大阪の影響を受けたと考えられる若年層が使用する用法に世代差が認められる。→〔関連文献：樫垣（1946）・前田（1949）・中井（1992）〕

- (3) A 「あした行くか」は、「アシタイク」カ
「アシタイキナ」ハル「カ」 / 「アシタイカハ」ル。

「イキナハル」と「イカハル」では丁寧の度合にほとんど違いはない。ただ、あまり親しくない人に対しては「イキナハル」は使いにくい。>

- B 「あした行きますか」「アシタイカハリマス」カー
C 「あした行きますか」「アシタイカハリマス」カー

この設定された全ての場面（A 親しい友人・B 近所の年長者・C 土地の目上人）に、尊敬の助動詞「ハル・ヤハル」を用いても違和感はない。

ここで示された五段動詞「行く」と「ハル・ヤハル」の接続については、「イカハル」というようにア段接続する京都を中心とした地域と、大阪を中心とした「イキハル」というようなイ段接続を行なう地域に分かれる。奈良盆地では、この老年層の調査結果「イカハル（ア段接続）」のように、従来からの京都を中心とした用法と、大阪の影響を受けて若年層が使用する用法とに世代差が認められる。

- (4) A 「温泉に行かないか」は、「オンセンニイコ」カ
「オンセンニイ」カヘン「カ」 / 「オンセンニイ」カハラヘン「カ」
B 「温泉に行かれませんか」は、「オンセンニイカハリマセン」カ
C 「温泉に行かれませんか」は、「オンセンニイカハリマセン」カ

ここでは、(3)でふれた五段動詞「行く」と尊敬の助動詞「ハル・ヤハル」との接続と同じように、打消表現についても「ヘン」との接続において、Aで見られるようなア段接続「イカヘン」が認められる。この「イカヘン」は、「ハル・ヤハル」のア段接続「イカハル」と同様、京都を中心とした地域と、これをエ段で接続する「イケヘン」（「ハル・ヤハル」におけるイ段接続「イキハル」）を使用する大阪を中心とした地域に分かれる。奈良盆地では、この老年層の調査結果「イカヘン（ア段接続）」のように、従来からの京都を中心

とした用法と、新しい大阪の影響を受けたと考えられる用法とに世代差が認められる。→〔関連文献：中井（1997）〕

- (5) A 「しますか」は、「シャハリマス」カ
B 「されますか」は「シャハリマス」カ
「する」+「ヤハル」 > 「シヤハル」 > 「シャハル」

(6) A 「見ましたか」は、「ミハリマシ」タ / 「ミヤハリマシ」タ
B 「見ましたか」は、「ミハリマシ」タカ / 「ミヤハリマシ」カ
設問(2)でふれたように奈良盆地を含む近畿地方の中心部の広い地域では尊敬の助動詞「ハル・ヤハル」は、五段動詞以外の動詞と接続では「ヤハル」（来る：キヤハル・する：シヤハル・見る：ミヤハル）で接続する。これに対して大阪を中心とした地域では、動詞の活用の種類に関係なくすべて「ハル」（来る：キハル・する：シハル・見る：ミハル）で接続し、当該地域では大阪を中心とした地域で見られる新しい型式は、もっぱら若年層が使用すると考えられてきたが、この老年層の調査結果のように両型式の併用が認められることは注目されるものとする。→〔関連文献：金沢（1993）・中井（1994）〕

- (7) A 「ゆうべは何時に寝ましたか」は、
ユウ「ベ」ナ「ン」ジニ「ネヤハリマシ」タ
B 「ゆうべは何時に寝ましたか」は、
ユウ「ベ」ナ「ン」ジニ「ネヤハリマシ」タカ
C 「寝てください」は、「ネテクダ」サイ

- (8) A 「どこに行っているか」は、「ドコイク」ノ / 「ドコイカハル」ノ
B 「どこに行っていますか」は、「ドコイカハリマス」ノ
C 「どこに行っていますか」は、「ドコイカハリマス」カ
この設定ではテイル形の「タハル」は出現せず、回答のようになる。

- (9) A 「どうぞ食べてくれ」は、タベテ「クレル」 / タベテ「ヤ
B 「どうぞ食べてください」は、タベテ「クダ」サイ
「アガッテクダ」サイ
C 「どうぞ食べてください」は、タベテ「クダ」サイ
「アガッテクダ」サイ

- (10) A 「その写真を私に見せてくれないか」は、
「ソノシャシン」ミセテ「クレル」 / 「ソノシャシン」ミセテ「クレハル」
B 「その写真を私に見せてくださいますか」は、
「ソノシャシン」ミセテ「クレハリマセン」カ
C 「その写真を私に見せてくださいますか」は、

1-2 第三者敬語

(11) A「家に居るだろう」は、「ウ」チニ「ヤハル」ヤロ
「ウチニヤル」ヤロー

B「家に居るだろう」は、「ウ」チニ「ヤハル」ヤロ

C「家におられるでしょう」は、「ウ」チニ「ヤハル」ヤロ

調査地域の第三者の待遇では、特にAに関しては「ハル・ヤハル」の下位を待遇する「ル・ヤル」が用いられる。奈良盆地では、この「ル・ヤル」以外に「ハル・ヤハル」より待遇度の下がる補助動詞としては、「イス・ヤイス」、「インス・ヤインス」、「タル」、「ル・ラル」などがあり、それぞれが独自の分布領域をもって存在する。→〔関連文献：西宮（1959）・中井（1989）〕

(12) A「居なかった」は、「ヤハ」ラヒン「ダ
「ウ」チニ「ヤラ」ヘンデ「ン

B「居なかった」は、「ヤハ」ラヒン「ダ

C「居なかった」は、「ヤハ」ラヒン「ダ

Aでは「ル・ヤル」を用いての回答も併用されている。

この設問では第三者はA・B・Cと変化させているが、話相手はA・B・Cともに同じ友人で変化なく、コードに変化がないため回答はほぼ同じになる。つまり、近畿方言の待遇表現は第三者に対する待遇にその特質があるとされるが、その特質が顕在化する鍵はもっぱら話相手の方が握っていると言えるであろう。→〔関連文献：西宮（1959）・宮治（1987）・中井（1989）〕

(13) A「そう言った」は、「ソーユワハ」ッタ / 「ソーユワ」ッタ

B「そう言った」は、「ソーユワハ」ッタ

C「そう言った」は、「ソーユワハ」ッタ

Aでは「ル・ヤル」を用いての回答も併用されている。

(14) A「今そこに行っていた」は、イ「マ」ソコニ「イッタハ」ッタ

B「今そこに行っていた」は、イ「マ」ソコニ「イッタハ」ッタ

C「今そこに行っていた」は、イ「マ」ソコニ「イッタハ」ッタ

先にもふれたようにこの地域の老年層では、テイル形への接続は、京都などと同じ「タハル」（行く：イッタハル）を用い、大阪の影響を受けて使用される若年層の「テハル」（行く：イッテハル）と世代差を見せる。

テイル形の「タハル」については、洒落本や雑俳資料および落語速記本などから、幕末・明治の「ハル・ヤハル」出現期には「いふてやはる」のように「テヤハル」であったが、明治20年代ごろから現在見られる「タハル」と「テハル」に分化していった。〔関連文献：金沢（1993）・中井（1994）〕

- (15) A 「友達が来ている」は、「キテル / 「キタハル
 B 「来ている」は、「キタハリマス
 C 「来ている」は、「キタハリマス
- (16) A 「仕事をしている」は、「シゴトオシタハル
 B 「仕事をしている」は、「シゴトオシタハル
- (17) A 「見せてもらった」は、ミセテ「クレハ」ッタ / ミセテ「モ」ータ
 B 「見せてもらった」は、ミセテ「クレハ」ッタ
 C 「見せてもらった」は、ミセテ「クレハ」ッタ
- (18) A 「見せてくれた」は、ミセテ「クレハ」ッタ
 ミセテ「クレ」ヤッタ
 B 「見せてくれた」は、ミセテ「クレハ」ッタ
 C 「見せてくれた」は、ミセテ「クレハ」ッタ
- (19) A 「私にくださった」は、「クレハリマシ」タ
 B 「私にくださった」は、「クレハリマシ」タ
- (20) A 「いただいた」は、「モ」ロテン
 B 「いただいた」は、「モ」ロテン

II. 謙譲表現

II - 1 謙譲表現

- (21) A 「私も」は、ワタ「シ」モ
 B 「私も」は、ワタ「シ」モ
 C 「私も」は、ワタ「シ」モ
- (22) A 「十分に食べました」は、モージュ「ブ」ンニ「イタダキマシ」タ
 B 「十分に食べました」は、モージュ「ブ」ンニ「イタダキマシ」タ
- (23) A 「持ちましょう」は、モッテ「イキマヒョカ
 B 「持ちましょう」は、モッテ「イキマヒョカ
- (24) A 「待たせたね」は、マッテ「モ」ータ「ナ」ー
 B 「お待たせしました」は、「エ」ライマッテ「モ」ーテ「ナ」ー
 C 「お待たせしました」は、「エ」ライマッテ「イタダキマシ」テ
- (25) A 「駅で待っているよ」は、「エキデ」マッテ「ル」ワ
 B 「駅で待っていますよ」は、「エキデ」マッテ「マス」ワ

C「駅で待っていますよ」は、「エキデ」マッテ「マス」ワ

- (26) A「言ってくれ」は、「ユートイテ」
B「言ってくれ」は、「ユーテクレハリマス」
C「言ってくれ」は、「ユーテクレハリマス」カ

- (27) A「これをやろう」は、「アゲマシヨ」カ
B「これをあげましょう」は、「モロテクレハリマ」ス
C「これをあげましょう」は、「モロテクレハリマス」カ

この「これをあげましょう」をモロテクレハリマスカ（貰っていただけますか）というような言い回しは、～サセテイタダキマス（：「それでは先に休まさせていただきます）と同様、この地域の50代以上の女性にとっては、日常よく用いられる表現である。

II-2 身内敬語

- (28) A「買ってやった」は、「コータ」ッタ
B「買ってやった」は、「コータリマシ」テン
C「買ってやった」は、「コータリマシ」テン

- (29) A「主人はもう帰っている」は、モー「カエッテキ」マシタワ
「カエッテキャハリマシ」タワ

B「主人はもう帰っています」は、「カエッテキャハリマシ」タワ

第三者への待遇表現は、話し手と話相手と話題の人物の三者の関係によって規定され、設問Aの場合は、話題の人物が家族なので素材待遇語を付加しない用法（モー「カエッテキ」マシタワ）が普通である。それではこれと比べて（「カエッテキャハリマシ」タワ）という「ハル・ヤハル」を伴う用法が、身内尊敬用法を示すか（近畿ではお父さんの権威がそんなに高いのか）と言えはそうではなく、ここでの「ハル・ヤハル」は話題の人物を待遇するために用いられているのではなく、これを伴わない用法がやや粗野な色彩を帯びるため一種の「美化語」として使用されている。

III. 丁寧表現

- (30) A「行くよ」は、「イク」デ
B「行きます」は、「イキマス」

(31) A「寒いね」は、「サ」ムイ「ナ」ー
B「寒いね」は、「サ」ムイ「デン」ナー
C「寒いですね」は、「サ」ムイデス「ネ」ー

- (32) A「居るよ」は、「イル」ワ / 「イテル」デ
 B「居ますよ」は、「イマス」
- (33) A「よかったねえ」は、「ヨ」カッタ「ナ」ー
 B「よかったですね」は、「ヨ」カッタデス「ネ」ー
 C「よかったですね」は、「ヨ」カッタデス「ネ」ー
- (34) A「そうか」は、「ソー」カ / 「サヨ」カ / 「ソー」ケ
 B「そうですか」は、「ソーダッ」カ
 C「そうですか」は、「ソーデス」カ

奈良盆地では、文末助詞による待遇表現もあって、かつては「ソーカ」という表現は用いられず、Aの場面（親しい間柄）ではその「親愛」を表現する「ソーケ」が使用されてきたが、近年「ケ」が汚ないことばとして忌避され急速に衰退している。→〔関連文献：西宮（1959）〕

IV 人間関係に応じた待遇表現

IV-1 特定表現の待通表現

- (35) 「その角を曲がって右へ行くと～」は、
 「ソノ」カドオ「ミギニマガ」ラハッテ

- (36) 「とんでもない」 N. R

IV-2 多人数場面の待通表現

(37) 村（町内）の寄り合いで、何か世話役を頼まれ、それを引き受けるときはどのように言いますか。

「イ」ッショー「ケンメイツトメサセテイタダキマス

くもちろん、引き受ける前にはたとえ自分以外に適任の者がいないといったことが明白でも「私には荷が重うございますさかい、どなたかもっとええ人をお願いしていただけますか」と断わるのが普通で、もうこれ以上断わったら人様の迷惑になるという手前まで、簡単に引き受けたりしはしない。そうしないと、ムラではお調子者と陰で色々と言われる

(38) 村（町内）の会合で装束することになり、「今度の旅行には参加者が少ないので、皆さん参加してほしい」というときは、どのように言いますか。

コ「ン」ドノリョコー「ワ」サンカ「サレルカ」タガ「スク」ナイノデ、
 「ミ」ナサン「ド」ードサンカ「シテクダ」サイ

IV - 3 位相による待通表現

	あいさつ	「どこへ行くのか」
1. お寺の住職さん	オハヨー「ゴザイマス	「ドコイカハリマス」カー
2. 校長先生	オハヨー「ゴザイマス	「ドコイカハリマス」カー
3. 見知らぬ年配の男性	オハヨー「ザイマス	「ドコイカハリマス」カー
4. 見知らぬ年配の女性	オハヨー「ゴザイマス	「ドコイカハリマス」カー
5. 顔見知りの年上の男性	オハヨー「ゴザイマス	「ドコイカハリマス」カー
6. 顔見知りの年上の女性	オハヨー「ゴザイマス	「ドコイカハリマス」カー
7. 10歳ほど年下の見知らぬ男性	オハヨー「ゴザイマス	「ドコイカハリマス」カー
8. 10歳ほど年下の見知らぬ女性	オハヨー「ゴザイマス	「ドコイカハリマス」カー
9. 同級生の男性	オハ「ヨ」-「サン	「ト*コイク」ノ
10. 同級生の女性	オハ「ヨ」-「サン	「ト*コイク」ノ
11. 10歳ほど年下の顔見知りの男性	オハ「ヨ」-「サン	「ト*コイク」ノ
12. 10歳ほど年下の顔見知りの女性	オハ「ヨ」-「サン	「ト*コイク」ノ
13. 近所の中学生の男の子	オハ「ヨ」-「サン	「ト*コイク」ノ
14. 近所の中学生の女の子	オハ「ヨ」-「サン	「ト*コイク」ノ

III 総括（まとめ）

奈良盆地の東部に位置する天理市長柄町の老年層女性の調査結果から、これまでの西宮（1959）や中井（1989）で明らかになってきた待遇表現の実態が改めて確認されることになったと考える。

ここでは、今回の調査結果に加え、先行する2つの研究成果を併せて、当該地域の待遇表現の体系を示し、まとめとした。

まず、天理市長柄町では、上向きへの待遇には「ハル・ヤハル」をもちい、それに次ぐ待遇では「ル・ヤル」をもちいる。

(第三者：奈良盆地の待遇表現型式)				
	北部（奈良・郡山）	東部（天理・桜井）	南部（橿原・明日香）	西部（高田・御所）
上むき	← ……	「ハル・ヤハル」	……	→
同等	「ル・ラル」	「ル・ヤル」	「タル」	「イス・ヤイス」
下向き	← ……	「ヨル」	……	→

また、「ハル・ヤハル」は、京都を中心とした用法で、テイル形では「タハ

ル」(来ている：キタハル)、五段動詞との接続においてはア段接続(行く：イカハル)、五段動詞以外との接続においては「ヤハル」(来る：キャハル)というこれまでの型式が改めて確認された。しかしながら、五段動詞以外との接続における「ヤハル」については(見る：ミハル)というこれまでとは異なる新しい形式も認められたことから、大阪大都市圏における言語動態の今後を考える上で「待遇表現形式」の推移が改めて注目されるものとする。

関連文献

- 金沢裕之【1993】「尊敬の助動詞「ハル」の成立をめぐって」(版大日本語研究5)
都竹通年雄【1955】『奈良県北部方言覚書』(近畿方言双書2)
中井精一【1989】「奈良盆地中南部における待遇表現形式の分布について」(地域言語1)
中井精一【1990】「奈良盆地の表現法に関する史的資料」(岐阜～長浜グロットグラム報告書)
中井精一【1992】「関西共通語化の現状」(版大日本語研究4)
中井精一【1994】「近畿型待遇表現形式の成立とその伝播をめぐって」(天理大学おやさと研究所研究報告会報10)
西宮一民【1959】「奈良県方言の待遇表現について」(国語学36)
彦坂佳宣【1984】「近世後期上方資料としての雑俎」(文芸研究107)
前田 勇 【1949】『大阪弁の研究』
宮治弘明【1987】「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」(国語学151)

(なかい せいいち 天理大学附属参考館)